



農作業メモ

麦類は種期の栽培管理

近年、熊谷でも暖冬傾向が続いています。暖冬により、麦類には次のような影響が考えられます。

- ① 茎立ちや出穂が早まり、凍霜害のリスクが高まる。
- ② 雨がまとまって降り、湿害や肥切れが発生しやすい。
- ③ 雑草の多発や赤かび病の発生リスクが高まる。

以下の管理ポイントを踏まえ、は種期の作業を行いましう。

ほ場準備

- 土づくりのため、稲わらや堆肥を積極的に施用しましょう。なお、今まで稲わらをすき込んでいなかった場合は、すき込み始め1〜3年目までは分解促進のため、石灰窒素を10aあたり20kg施用しましょう。

- 排水対策として水稲収穫後速やかに、ほ場の周囲とほ場内5〜10m間隔で排水溝を設置しましょう。排水溝は排水路につな

げて速やかに地表水を排水させます。

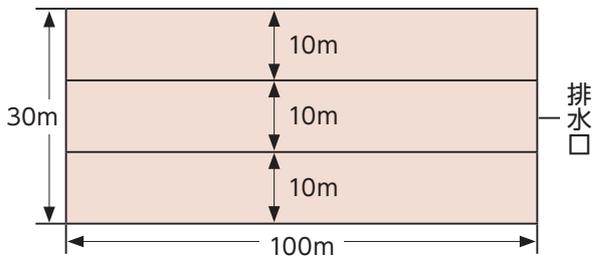


図 30a ほ場の排水溝(明渠)の例

- サブソイラ等による心土や耕盤の破碎や弾丸暗きよを施工し、地下への排水性を良好にしましょう。

- 作土層は15cmを目標に耕起しましょう。作土が浅いと根域が狭くなり、生育量が劣ります。また、成熟期近くなって麦が急に枯れあがる「枯れ熟れ症状」も作土深が浅いと発生が多くな

表1 基肥施肥量 (kg / 10a)

品種	化成肥料 444
さとのそら	60
あやひかり	60
ニューサチホゴールデン	50
すずかぜ	50

表2 基肥一発体系の施肥量 (kg / 10a)

品種	軽量高窒素麦一発 27号
さとのそら	45
あやひかり	45
ニューサチホゴールデン	30
すずかぜ	30

ります。
● 麦は酸性に弱い作物です。酸性に偏った土壌では、葉の黄化や生育抑制等の障害が発生します。

● 事前に土壌診断を行い、pH 6.0〜6.5を目標に必要な量の石灰資材を施用しましょう。

施肥

● 収量と品質を確保するため、品種に応じて肥料を施用しましょう。

は種・除草剤散布

● は種適期は、大麦が11月5日〜20日、小麦が11月10日〜25日です。

● 必ず種子消毒をして、適期に薄まきを徹底しましょう。10a当たりの適正は種量は、小麦さとのそら6kg、あやひかり8kg、ビール麦6〜8kg、六条大麦5〜6kgです。

● は種作業と除草剤散布はワンセットで行いましょう。は種後の除草剤散布が遅れた場合、雑草が発生することがあります。

● 降雨が予想される場合は、は種直後に除草剤が散布できるか判断して作業しましょう。

● は種後の鎮圧は、除草剤の効果を高めるとともに、土壌水分が低い時の出芽を良好にします。ただし土壌が湿潤な場合は湿害を助長するため、土壌の状態を判断しましょう。

大里農林振興センター

農業支援部

